

米国MSU継続教育部の点検・評価について（Ⅲ）

小川 哲 生

はじめに

本論文の趣旨は、米国ミシシッピ州立大学継続教育部（Mississippi State University, Division of Continuing Education. 以下MSU CE）が、機関別基準認定団体総会（AIAB）の地域団体である南部地区基準協会委員会（SACS）から資格再認定を得る際受けた実地調査についての調査である（Ⅰ）の論文、及びSACSが資格再認定する際のその基準ないし視点について調べた（Ⅱ）の論文に続き、MSU CEが作成した点検・評価報告書の内容について調査するものである。

MSU CEの自己点検・自己評価活動は、既述の様に、10年毎に更新されるSACSからの資格再認定を得る必要から、実地調査の際に要する点検・評価報告書の作成と、その5年前に定期的に行う自己点検・評価の作成をもって行われている。今回の調査の対象としたのは、1993年4月に作成されたSACS実地調査用の点検・評価報告書と、その5年前に作成された自己点検・評価報告書である。自己点検・評価報告書の内容は、SACS実地調査用の点検・評価報告書に全対応しているので、ここでは主にSACS実地調査用報告書について調べることにする。

報告書は、A4タイプ150頁程度のものであり、その構成は、大別して(1)教育活動の使命とそれを実行していく組織等からなる、MSU CEの活動概要をまとめたもの(2)SACSの作成した『Handbook for Peer Evaluators』の第4部「遠隔教育活動」で提示した質疑に対する回答を中心にまとめたもの(3)その裏付けとなる各種データや評価様式等 から構成されている。この構成に従って、以下調べてみる。

I MSU CEの教育使命とその実施の組織等

(1) 教育使命

報告書で述べているものを簡述すると、「MSU CEの使命は、伝統的な教育制度によってでは受けられることが困難な個人、集団、企業等多様な学習意欲の持ち主に対し、彼等の意見を聞いて、教育機会を拡大していくことにある。」この使命は具体的にはcredit科目及びnon-credit科目を開設することによって実施している。

現在MSU CEは、MSU各大学院各学部等が開設する科目の内、約100科目を開設し、大学院生約600名、学部生が約700名在籍している。学生は、専攻によってはCEが開設する科目（credit）を修得すれば、その単位が卒業要件単位となる。尚、一般的に言って、米国の継続教育部は、通学課程の科目の一部（卒業全単位のうち約1/4以下）を通信教育（イン

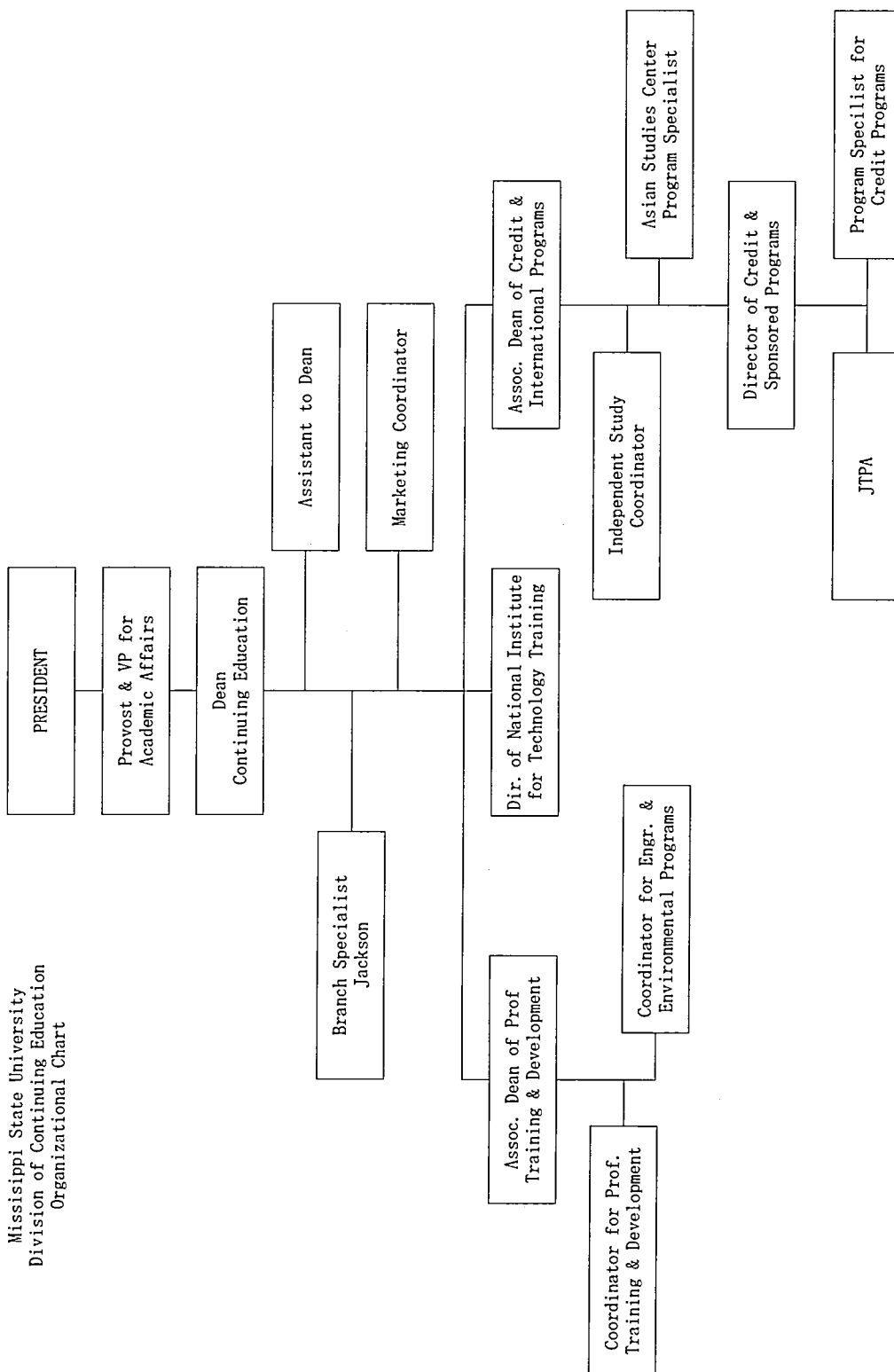
ターネットや衛星放送利用のものを含む）で行ったり、あるいは、本キャンパスから遠隔地に在住する学生のための分校キャンパスに於ける面接授業を行うのが主なる役割である。日本の大学通信教育のように、通信教育課程に入学し、同課程で卒業要件単位を修得する一貫した通信教育課程を開設している大学は極く僅かである。credit科目の開設以外の教育活動として重要なのは、米国の大学継続教育部は、20世紀初頭にランドグラント大学である州立大学が、州民向け教育サービス（納税者に対する義務の意を含む）として始まった例が多いので、職業訓練、生涯学習的役割のための科目（non-credit）の開設である。通学生向けのみならず、社会人、主婦、企業等の学習要求に応じるべく多様な実践的科目を多く開設したり、企業研修の請負を行ったりしている。

報告書では、教育使命に応じた継続教育部の役割について、各教育活動別に記述している。

(2) 継続教育部の組織

継続教育部の組織は、前述の教育活動の内容に応じて下図の通りとなっている。SACSの調査は、継続教育部の諸活動に応じた管理体制にその重点が置かれている。報告書は、また、管理部門別に点検・評価している。

Mississippi State University
Division of Continuing Education
Organizational Chart



管理運営上の責任体制は、学長の下にいるプロボースト（教学担当副学長であり、5名いる副学長の内では筆頭に当たる）の管理の下に継続教育部長（Dean）が直接的管理責任者として継続教育部全体の管理運営に当たっている。部長は、MSUの他の8学部長と同格であり、人事・予算・計画等全てについて強い権限を持っている。部長補佐機能として部長補佐（Assistant to Dean）、マーケティング・コーディネーター、ジャクソン分校責任担当があり、業務の企画立案は主に彼等が当たっている。ライン業務として、部長の下に高度専門及び職業教育担当の副部長、正規単位科目（credit）及び国際教育担当副部長、及び全米技術教育機関（National Institute Technology Training）担当課長がいる。各々の副部長の下には、各教育活動に応じたコーディネーター、課長、スペシャリストがいる。

米国ではおよそ30年ほど前から通信教育課程のことをcorrespondence courseと言う呼称からindependent studyと名称するのが通例である。州立大学の継続教育部の下に置かれている通信教育課程は、大学のみならず高等学校通信教育をも担当するのが全どであり、MSU CEには約5,000名の高校生が在籍し、高校卒業資格に要する科目の一部を履修している。尚、米国は強い学歴社会であるので、MSUでは、課長になるためには学位（PH.D.ないしED.D.）が必要であり、MAまでのものは、コーディネーターないしスペシャリストに滞まるのが一般的である。

報告書は、部長等各管理責任者の任命、分限等のシステム及びその勤務評価システムについて記している。

(3) 発展への見通し、強さと限界等

報告書は、継続教育部の簡単な歴史と今後の発展への見通しについて述べており、後述の5年計画の具体案の元となるものが示されている。継続教育部の持つ強さと限界についても触れており、強さとして、科目設定・運営等の柔軟さ、最新式コンピューターを活かした管理システム、他の教育機関との有効な提携による教育活動、優れた設備、献身的なスタッフ、発展への将来性の豊かさ等が挙げられ、限界としては、大学の中での継続教育の位置・役割がまだ十分認識されていないこと等が挙げられている。この点については、日本と同様、米国でも継続教育担当者の大きな不満となっている。

(4) 評価システム

点検・評価システムが無くては、大学の管理運営が出来ないと思うのは、米国の大学では常識であるので、点検・評価を如何に大学運営の改善に活用しているかが重要な点となる。報告書は、点検・評価の有効的利用について以下のように述べている。

- (イ) 全ての科目を受講生より評価させている。
- (ロ) 部長を中心とする幹部会を定期的に行い、評価結果やマーケティング等について協議している。
- (ハ) 予算の執行状況や財務状況について、毎月当初年度予算と比較しながら見直しを行っている。
- (ニ) 教育活動部門別担当者と予算について定期的打ち合わせを行い、企画・実施等について判断を下している。

(ホ) 教員及び職員に対する勤務評価を毎年行い、適正な人事を行っている。

米国は日本に比して競争社会であるので、それ故に組織全体、管理者、教員、職員に対する勤務評価システムは発達していると言って良いであろう。報告書は、継続教育部が行う教育活動のみならず、それを管理する側の評価についても記している。

II SACSの質疑に対する回答

SACSの「Handbook for Peer Evaluators」第4部「遠隔教育活動」で記されている、継続教育部への質疑事項(1)大学全体の教育の中での遠隔教育の役割について(2)遠隔教育の立案・実施について(3)遠隔教育実施上の質の維持について(4)自己点検・評価との関わりについて、にほぼ対応して記されているMSU CEの点検・評価報告書の内容について、紙面の制限上その概略を紹介する。

(1) 大学全体の中での遠隔教育の役割について

MSU CEは、この質問を「継続教育部の目的とMSUの使命を達成する上での役割」として表記し、(a)使命とそれを達成していく組織(b)継続教育部が行う各部門別教育活動に分けて記述し、後者については、かなり具体的にその内容を報告している。

(2) 遠隔教育の立案と実施について

MSU CEは「継続教育の目的は何か」と表記し、5年計画案を以下のように分けて具体的に報告している。ここでは、その内容をより詳細に紹介する。

(イ)・ジャクソン(州都)に大学共同利用機関を設立する。

- ・ヴィックスバーグ分校に教養教育コースを設立する。
- ・ESL教育を拡大強化する。
- ・環境教育に関わるcredit及びnon-creditコースを設け、それに関する新しい資格を設ける。
- ・コロンバス空軍基地内に最低一つは大学院教育のコースを増設する。
- ・生涯学習のための老人学センターを設立する。
- ・児童虐待防止センターを設立する。
- ・環境教育の科目を増加する。
- ・本校キャンパス内に社会人学生向けオフィスを完備する

(ロ) 遠隔教育

- ・インターネット利用等の通信技術利用の教育の可能性についての報告書を作成する。
- ・衛星放送は利用した生放送教育コースを最小でも1科目増設する。
- ・他の教育機関との提携を促進する。

(ハ) 技術教育

- ・全米技術訓練機関(NITT)で指導別役割を果たす

- ・ 現在利用のコンピューターシステムを更新する
- (二) 建築計画
 - ・ 本部の改築
 - ・ 新会議室の増設
 - ・ 情報処理室の拡張
- (ホ) 継続教育部管理運営に於けるトータル・クオリティ管理原理 (TQM) の完全導入

上記報告内容は、既述のように、10年毎に行う自己点検・評価とSACSによる10年毎の期限付き資格再認定実地調査に合わせ、5年毎に各々報告書を出す関係上、計画が5年単位となっている。

日本の同様な点検・評価報告書と比べて際立って異なる内容を持っているのが、この部分である。日本の場合は、大学の管理運営、教育や研究等の現状について、非常に詳細な調査(点検)を行い、そこから改善へ向けて(評価)報告するのが通例であるが、米国では筆者が数校調査した限りでは、5年毎作成される計画案に対し、それがどこまで実施されたかを点検し、そこから5年以内にどこまで改善すべき事柄を指摘すると同時に、更なる発展のために新計画を打ち出すのが通例である。

(3) 継続教育部が掲げた目標の期待する成果は何であるか

SACSの(2)の質疑である「遠隔教育の立案・実施について」の報告を、MSU CEでは、新たに(3)の質疑事項を設け、何故(2)で掲げた各々の計画を持つのか、その理由を各項目別に具体的に述べ、その期待する成果を述べている。一例として、(イ)の「ヴィックスバーグに教養教育コースを設ける」ことについては、同市で行ったタウンミーティング及びそこでのアンケート調査による結果を基に、コース設営の必要性、それを具体化するためのプランを述べている。

MSU CEは、教育活動全てについて、受講生から恒常的な評価を受けるようにしており、またマーケットリサーチの一環として、受講生以外にも適宜アンケート(needs assessments)を行っており、それらが、教育活動の立案計画の基となっている。

(4) 遠隔教育実施上の質の維持について

MSU CEでは、この質問を「期待される成果の到達を、継続教育部はどのようにして計っているか」としている。また、SACSの質疑事項の第4である、遠隔教育の質の維持と、それと「自己点検との関わり」についてを、本項でまとめて報告している。その概要は、次の通りである。

- (イ) 各授業の終了時に行う評価は、継続教育部の生命線であり、もし受講生の満足を得られなければ、彼等は再び受講生として戻ってくることはない。
- (ロ) 継続教育部は、全ての授業毎に受講生による評価を行っており、その授業の適切さの判定を調べている。
- (ハ) 継続教育部に対する需要を恒常的に保つため、必要に応じてマーケティングをしている。

- (二) 継続教育部の受講生の特色は、自発的意思によって受講しているので、それだけに再び受講したいとの気持ちをもたすことが何より必要である。それ故、最も厳しい評価システムの導入が必要である。
- (ホ) 継続教育は、受講生の全が自発的意思によって利用するので、その意味では最も「市場」の動向に左右される。授業科目の設定に関し、市場調査、授業評価が何よりも大切である。
- (ヘ) 継続教育部の目標は、受講生の需要を見定めることによって策定される。

以上のように、SACSの質疑に対応する形を持った点検・評価報告書は、実態調査に関わる細かい点検よりも、継続教育個有の教育形態が持つ特質を最大限生かすため、学習者の需要に応じた具体的な教育活動計画を打ち出すことにその強調点が置かれている。この事が、点検・評価の最も重要な役割は「使命とその実施」を点検・評価することにあるというSACSの要求を満たすこととなっている。

III 授業評価の方法

既述のように、MSUCEは、全ての授業科目について、その終了後受講生全員にEvaluation Formを配布し、評価を回収している。ここでは、その代表的なものとして(1)教員評価表(2)通信授業の評価表の実物を挙げてみる。全て直訳とした。

(1) 教員評価表

科目名 _____

教員名 _____

以下に記されていることを注意深く読み、数字に○をつけてください。

- (1) 全く同意しない (2) 同意しない (3) どちらともいえない (4) 同意する
(5) 強く同意する

- | | |
|-------------------|--|
| 1 2 3 4 5 | 1. あなたは、担当教員によって、この科目に惹きつけられましたか |
| 1 2 3 4 5 | 2. この科目を履修したことによって、あなたは何か新しい視野を見出しましたか |
| 1 2 3 4 5 | 3. 担当教員は、あなたの学習を促す上で、適宜アドバイスをしていますか |
| 1 2 3 4 5 | 4. あなたは、この授業で学修した知識・技能を生かせると思いますか |
| 1 2 3 4 5 | 5. この科目の履修目標は、あなたによく説明されていますか |
| 1 2 3 4 5 | 6. 担当教員は、レポート等を速やかに返却していますか |
| 1 2 3 4 5 | 7. 担当教員は、授業時間を、上手に使って行っていますか |

- | | |
|-----------|--|
| 1 2 3 4 5 | 8. 担当教員は、みなさんの学修を継続させる意欲を誠実に持っていますか |
| 1 2 3 4 5 | 9. 担当教員は、授業を行う際、威圧的でない、温かい雰囲気を持っていますか |
| 1 2 3 4 5 | 10. この科目を履修した結果、あなたはより専門的になったと思いますか |
| 1 2 3 4 5 | 11. 担当教員は、教材をうまく活用し、授業に興味あるものにしてますか |
| 1 2 3 4 5 | 12. 担当教員は、授業に対し熱意をもって当たっていると思いますか |
| 1 2 3 4 5 | 13. 担当教員は、授業に適切な教材を使っていますか |
| 1 2 3 4 5 | 14. 担当教員とのコミュニケーションは良いですか |
| 1 2 3 4 5 | 15. 担当教員のプレゼンテーションは、適切なものですか |
| 1 2 3 4 5 | 16. 担当教員は、講義内容が、皆さんに理解されうるものと認識していますか |
| 1 2 3 4 5 | 17. 担当教員は、社会人学生個有の要求を理解していると思いますか |
| 1 2 3 4 5 | 18. 担当教員の援助により、あなたは、この分野でより力が付いたと思いますか |
| 1 2 3 4 5 | 19. あなたの成績や評価は、公平で客観的ですか |
| 1 2 3 4 5 | 20. この分野の他の科目を履修するならば、もう一度この担当教員に教えてもらいたいですか |

(2)通信教育評価法

この科目の評価のため少し時間を下さい。あなたの回答が、今後の通信教育の改善のために役立つと思います

アンケートは、最終の成績が出るまで教員に知らせることはありません。

1. あなたの学年は _____
2. あなたの年齢は _____
3. あなたの性別は _____

第1部

以下に○をつけて下さい。 SA=完全同意する A=同意する N=まあまあ
DA=同意しない SD=全く同意しない

	SD	DA	N	A	SA
4. 授業は試験に対応していますか	1	2	3	4	5
5. 授業内容は適切な難易度を持っていますか	1	2	3	4	5
6. 到達すべき学習目標は、明確ですか	1	2	3	4	5

- | | | | | | |
|-------------------------------|---|---|---|---|---|
| 7. レポート課題と試験は、あなたの知識を増加させましたか | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 8. 期待通りの授業内容であったと思いますか | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 9. レポート課題と試験はすぐに返却されましたか | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 10. 教員からのコメントは役に立ちましたか | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 11. MSUブックストアのサービスは良かったですか | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |

第2部

12. 面接授業に比べて、この通信授業科目はどうであったか○をして下さい

4 大変良い 3 良い 2 悪い 1 大変悪い

13. 科目の中で、どの科目が一番良い科目でしたか

14. 学習指導書 (course study guide) の中で分かりにくかったところ

誤っていたところがあれば知らせて下さい。

15. この科目を履修した主な理由を1つ挙げて下さい

- (イ) 卒業単位を満たすため
- (ロ) 成績を上げるため
- (ハ) 時間の選択が出来るため
- (ニ) 自分自身のため
- (ホ) 現在の職業（仕事）に役立つため
- (ヘ) 職業を変えたいため
- (ト) その他

16. 何故この科目を通信教育で取ったのですか

- (イ) 卒業単位を取る上で、時間のやりくりがうまくできるので
- (ロ) 通学課程より通信教育課程の方が好きなので
- (ハ) 通学課程の時間割の関係で
- (ニ) 仕事の関係上
- (ホ) 通学が困難なので

17. この科目を、どの位の時間で修得しましたか

- (イ) 1ヶ月以内
- (ロ) 3ヶ月以内
- (ハ) 6ヶ月以内
- (ニ) 1年以内
- (ホ) 不明

以上、評価表の代表的2例を挙げてみたが、報告書としては、その他各種の評価表と受講生による評価の実例がファイルされている。L部長の話によれば、評価の結果、毎年1割程度の教員を入れ替えるとのことである。

まとめ

MSU CEの点検・評価報告書の内容を調べた結果、そこには、日本の各大学が行っている自己点検・評価の視点と大きく異なっている幾つかのことに気づく。第1に、教育活動の内容を詳細に点検していくことによりも、点検・評価が大学の使命を果たしていく上で効果的に活用されているか否かに重点が置かれているということである。これは、必然的に、点検・評価を効果的に活用していく管理運営体制のあり方についての見直しに重点が置かれていることを意味している。それ故、大学の管理運営システムと点検・評価システムが効率的に関わっているか否かを調べるためにあるのが点検・評価の最も重要な目的となっている。第2に、上述の如くであれば、改善のための方策、新たな教育計画等の企画・立案が適切に策定されているかを見ていくのが点検・評価の目標となっていることである。第3に、市民サービスとしての教育の提供と言う役割を負っている継続教育部個有の特質から由来することでもあるが、点検・評価には常に外部からの要求・意見を聞いているか否かの視点があり、これは、市場の動向を見ながら経営をしていく他の企業と同質であると気づく。L部長は、よく話しの中で、半ば自嘲的に半ば誇りを持って、「教育はビジネス」であると言っているが、点検・評価報告書からそれを読みとることが出来る。

利用した資料・参考文献

1. MSU CE 「SACS Information Division of Continuing Education (Five Questions)」 1993
2. SACS 「Criteria for Accreditation Commission on College」 1992, 1996
3. SACS 「Handbook for Peer Evaluators」 1991, 1993
4. MSU CE 「Self Study Reports」 1988
5. その他MSU CE内に於ける管理者用の報告書・調査 等